

沖縄歴史の散歩道

vol.20

◆古民家を巡る①

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



漢那ウエヌアタイ遺跡の家型墓（宜野座村）



新盛家住宅の家屋内（西表島）

沖縄の伝統的な風景といえば、赤瓦屋根の建物に琉球石灰岩の石垣やフクギ並木などがイメージされます。戦争や戦後の開発でこうした沖縄の「原風景」はほとんど見られなくなりました。現在、伝統建築の家はわずかに点在している状況です。

木造建築物で沖縄最古のものは、住宅ではありませんが漢那ウエヌアタイ遺跡にある家型木棺墓でしょう。木材の分析から1350年頃と推定されています。住宅として古いのは18世紀頃のものが存在しています。そのなかでも有名なのは中村家住宅（北中城村）で、地頭代（現在の村長に相当）の家として18世紀中頃に築かれたと言われています。赤瓦屋根の建物で一番座から三番座、台所まで備えた母屋、離れのアシヤギに高倉と家畜小屋、フル（豚便所）からなる地方上層階級の住宅です。ただし赤瓦屋根は明治中頃に改築されたもので、それ以前、王国時代は竹茅葺の屋根でした。



中村家住宅（北中城村）

茅葺屋根として最古のものは西表島祖納にある新盛家住宅で、築150年以上とされています。「貫屋（ヌキヤ）」という古い建築様式の家となっています。県内で茅葺屋根の住宅は1980年代頃までは現役の住宅として残っていましたが、茅の葺き替えは大変な手間がかかり、瓦屋根と比べて格段にメンテナンスがかかるため、現在ではほとんど見ることはありません。

さて中村家住宅のような当時の豪邸に相当するような建物がなぜ明治まで茅葺屋根だったのでしょうか。実は琉球王国の時代には「敷地家屋制限令」があり、士族以外の庶民は住宅の様式や大きさなどに厳しい制限がありました。裕福だからと言って豪華な建物を建てることはできなかったのです。中村家は地頭代で当時の間切行政の実質的なトップでしたが、身分は百姓でした。

上里 隆史

（うえざと・たかし）

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ポニーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。



方の住宅はほぼ茅葺屋根の建物で、「穴屋（アナヤ）」と呼ばれる質素な家が多く、赤瓦屋根は間切番所などごく限られた場所にしかありませんでした。沖縄県になり家屋制限令が撤廃されると、地方の庶民たちもお金に余裕のある者はこぞって赤瓦屋根の建物を建てるようになったのです。



中村家住宅のフル（北中城村）